

トーマス・ブッデンブロークの倫理性 —ショーペンハウアーの思想に基づいて

別府 陽子

はじめに

トーマス・マン Thomas Mann (1875-1955) は、『ブッデンブローク家の人々』*Die Buddenbrooks* (1901) の主人公トーマス・ブッデンブロークを「業績の倫理家」、「現代の英雄」という¹。先行研究では、トーマスの倫理性にプロテスタンティズムの倫理、フリードリヒ大王による国家への服従の義務、カントの定言命法、そしてショーペンハウアー Arthur Schopenhauer (1788-1860) の「英雄的生き方」²の要請の受容が見られるが、最も強く影響しているのはニーチェ Friedrich Nietzsche (1844-1900) の『道徳の系譜』*Zur Genealogie der Moral* 第三論文「禁欲主義的理想は何を意味するか?」*Was bedeutet die asketische Ideale?* (1887) であり、トーマスは業績と権力獲得のために禁欲的に恋人との愛を断念して市民の役割を演じていると論じられている³。ここでいう市民とは、18世紀から19世紀にかけてドイツに存在した貴族に次ぐ支配階級で、プロテスタントの倫理に基づく実際性と有用性を重視する人々である。

トーマスの倫理的性格の問題性が明らかになるのは、妹のトーニが麦の先物取引を勧めるときである。トーマスは先物取引を「どさくさまぎれの金儲け…冷酷な搾取…」(499f.)と、倫理的理由を説いて断る。しかしひとりになると、停滞している業績挽回のために取引すべきではないかと迷い始め、それまで商人に不要として抑制していた、詩人のように自己の内面にこだわる内省が始まる。そして自分は「実際の人間なのか、それとも繊細な夢想家なのか?」(516)と葛藤する。

すると1866年のハンブルクでの大商社の倒産に伴う恐慌の記憶が蘇る。トーマスも多額の損害を被るが、それよりも商人仲間の情け容赦のない、エゴイズムむき出しの非倫理的態度に憤り、不運な友人が周囲から冷たい「不信」を受けるのを見

て、友人の苦しみを感受し、怒りと嫌悪でトーマス自身も傷つく。つまりトーマスは、商人でありながら利益よりも「不正」を嫌悪する人間、「正義」の意識の強い倫理的人間なのである。

それゆえ、トーマスという「業績の倫理家」は、実際性と夢想性という対立的な性格と倫理性を明確することで、より正確に理解できると思われるのである。この問題を考察するために、本稿ではトーマス・マンが若い頃に読み、共感したショーペンハウアーの思想にある倫理思想と性格論を用いることとする⁴。

1. ショーペンハウアーの倫理思想

ショーペンハウアーの倫理思想は、主著『意志と表象としての世界』*Die Welt als Wille und Vorstellung* (1819) 第4巻と、懸賞論文『道徳の基礎について』*Über das Fundament der Moral* (1840) に著されている。マティアス・コスラーが前者を「形而上学的」、後者を「経験的」というように⁵、主著のほうが叡智界の考察も含む詳細な論理展開になっているので、本稿では主著を用いる。

ショーペンハウアーによれば、世界の本質は唯一の「意志」であり、経験的世界は、「意志」が多様に個体化した「表象」の世界である。すなわち、我々は時間・空間という「個体化の原理」の下で個体を認識しており、個体は死ぬと元の「意志」に還るというのである。

個体化した人間の身体はそれぞれの境界でもあり、個体に現れる「意志」の衝動は常に自己の存在と安寧を図るエゴイズムである⁶。そのため個体化した「意志」同士は争い合うのであるが、個体は、本来は唯一の「意志」であるから、「苦しみを与えるものと、苦しみを受ける者は同一である」⁷という「永遠の正義」が成り立つ。

そして、ショーペンハウアーは最高に価値のあ

る道徳的行為を「共苦」Mitleid といひ⁸、「共苦」を「正義（公正）」Gerechtigkeit の徳と「人間愛」Menschenliebe の徳に分ける。「共苦」は、国や時代を超えて常に人間の本性そのものに存在するゆえに、人はどこにおいても、他者の「人間性」Menschlichkeit の「共苦」に訴えることができるのである⁹。

「正義」の徳は、他者に害を為さない、つまり「不正」を行わない消極的な徳である。「不正」とは、「個体が、他者の身体のうち現象している意志を否定することを介して、自分自身の身体範囲を超えて自己を肯定していくこと」¹⁰であり、「不正を被る者は、自己の身体を肯定する領域への他の個体の侵犯を、何らかの直接的な精神的苦痛として感じ取る」¹¹。つまり「不正」とは他の個体の境界を侵すことといえるが、「正義」の人はこのような「不正」を犯さないのである。

「人間愛」の徳は、「正義」よりもさらに明確に「個体化の原理」を見抜く場合に生ずる。それは善、愛、高潔さであり、エゴイズムなしに他者の苦悩を自己の苦悩と同一視して、他者の苦悩の緩和のために行動する積極的な徳、与える愛アガペーの徳である¹²。

また、ショーペンハウアーはカントの影響の下に、人間の性格を3つに分けて、個人のアイデアである本質的性格を叡知的性格、それが経験的世界に現れたものを経験的性格、後天的に習得する性格を習得的性格という。伊藤貴雄は、「共苦」とは他者の苦のアイデアを認識することのできる叡知的性格を具えた者に生ずる道徳的行為であり、「共苦」が生ずるのは、「個体化の原理」を見抜いて事物のアイデアを認識する芸術家の性質を具える者であるという。¹³

2. 実際性と夢想性

トーマスの実際的性質は、以下にヘルマン・クルツケがまとめているような、18世紀から19世紀にかけて存在したドイツ市民階級の特質である。

中世の階級秩序によれば、市民はまず、生業を営む都市居住者である。この伝統から勤勉、儉

約、秩序愛、時間厳守、誠実、美徳、義務履行という、典型的な階級の理想が発展する。それに対して生業を損なうのは悪徳である：怠惰、浪費、[...]。市民は有用性を通して自己の存在を正当化する。人生のどの一日も何らかの利益をもたらすのである¹⁴。

ドイツ市民階級の理想は、富と地位を維持するために必要な利益をもたらす有用性を重視する。穀物商会を手広く営むブッデンブローク家の家訓は、「日中は意欲的に仕事に励め、だが、夜は安らかに眠れるような仕事のみをなせ」（62）というもので、クルツケが挙げる勤勉や秩序愛などの市民階級の理想に合致している。

一家の繁栄の基礎を築いた老ヨーハンは、18世紀に流行した衣服を身に付けて、ロココ調の装飾を施した家を購入し、壁に牧歌的な風景画のタペストリーを掛けている。老ヨーハンの実際性は、18世紀的教養の理念を持ちつつ、素朴に利益獲得のために行動することである。

トーマスはこのような祖父と信仰心篤い父親を見習い、堅信礼では牧師に「節度を忘れるな！」（81）と諭されて、秩序を重視することを教え込まれる。トーマスは、成長過程で周囲の環境から市民階級の倫理を習得するのである。そして父親の死後社主になると、世間の人々に模範的市民として尊敬されて、市参事会員選挙の第一候補者になる。

トーマスは単に彼自身というだけではなかった。人々は彼の中にある、彼の父親、祖父、曾祖父の忘れがたい人格を尊敬した。そして彼自身の商売上の成功や公的な成功は別にして、彼は百年にわたる市民的名声の担い手であった。（451）

人々のトーマスに対する尊敬は、トーマスの先祖たちへの尊敬の上に成立しているのである。これらのことから、トーマスの市民的実際性は習得的性格といえる。

またクルツケがいうように、『ブッデンブロー

ク家の人々』の市民性は 18 世紀の都市貴族のものである¹⁵。老ヨーハンが「実際の理想か…いや、私はまったく賛成できん！ […] ギムナジウムや古典的教養が急に愚鈍なものになってしまう」

(32) というように、祖父の市民性は 18 世紀的である。そしてトーマスの母方のクレーガー家は貴族的生活をする大商人で、その影響を受けたトーマスの妹のトーニは、子どもの頃小さな王女様のようにふるまう。トーマスも必要以上に美しく身なりを整えており、生産者である土地貴族に気おくれせず対等に振舞い、「道徳的に質の悪い搾取者という印象を土地貴族の方々に与えたことはない」(503) と、市民倫理に反していないことを自負する。そして、時代が変わり新しい市参事会員に小売商の息子が選ばれると、不快感に趣味に合わないという。トーマスの市民性は、1848 年革命以降の自由・平等を掲げる新しい市民性ではないのである¹⁶。以上を総括すると、トーマスの実際的人格を形成する市民性は、家庭環境から得た習得的性格である¹⁷。そしてこの市民性は富と地位を維持するための有用性を重視しているゆえに、基礎にあるのは、ショーペンハウアーという個体の維持を図るエゴイズムである。

次に理想性について考える。トーマスの生来の性格、すなわち叡知的性格は、詩人のように深く内省する性格で、トーマス自身がこの性格を自覚しており、内省は商人に不要と考えて抑制する (vgl. 290)。そして第 10 部第 5 章でトーマスは、死を予感してショーペンハウアーの著作を読むのだが、その夜トーマスに、「ショーペンハウアー体験」という世界のアイデアを直観する美的観照、つまり、芸術家が為す体験が生じる¹⁸。従ってトーマスの理想性は、詩人的芸術家の性格である。アイデア観照は、個体である自己を滅却して個体化の原理を見抜くことで生じる体験であるから、個体を維持するエゴイズムは全くない。トーマスが先物取引の実行に迷うのは、本性から自然に利益を追求するのではなく、本性にない実際の市民的商人のエゴイズムを意識的に働かせなくてはならないからである。

3. 「共苦」：「正義」の徳

ショーペンハウアーは「アイデアを認識し、『個体化の原理』を見抜く人、現象の形式などは物自体に関係がないことを知る人だけが永遠の正義を理解し、把握する人であろう」¹⁹ と記し、さらに、このような人だけが徳の本質を理解するが、徳の実行にこれらの抽象的な認識は必ずしも必要ではないとも述べている²⁰。

トーマスは「この世のすべては比喩にすぎない」(302) と感じている。つまり経験的世界の現象の形式は物事の本質それ自体ではない、ということを感じているが、「個体化の原理」やアイデア、永遠の正義等の知識を持たない。それでも以下に論ずるようにトーマスは「共苦」の「正義」と「人間性」の徳を具えている。

トーニの最初の夫グリュンリヒが初めて訪ねてきたとき、トーニは嫌悪し、クリスティアンは嘲笑的に模倣する。しかしトーマスは「判断を控えた」(108)。また、父親の死後、お金や食事を目当てに来訪する牧師や伝道師が増えて、トーニは不満を言うが、トーマスは「黙って」(307) いる。トーマスは他人をむやみに否定も肯定もしない。ライバルの新興商人ハーゲンシュトレームについても、「ヘルマンはもう大変商売に役立っているし、モーリツは胸が弱いのりにっばな成績で学校を卒業した。大変頭が良くて、今は大学で法律を勉強しているそうだ」(128) と公平に彼らの優れた能力を認める。トーマスは他者の領域を侵害しない消極的な徳である「正義(公平)」を身に付けているのである。

また、他者への怒りはその領域を侵害する「不正」である。トーマスが腹を立てる場面は、働かない弟のクリスティアンとの兄弟喧嘩、病死した妹クララへの遺産を母が勝手にクララの夫に与えたとき、そして息子の音楽への傾倒を妻の影響と考えて、妻のいう「音楽的価値」という言葉に八つ当たりするときである。しかしこれらの怒りはトーマスの利己的な攻撃的侵害ではなく、トーマス自身が精神的、実際的に害を受けたと感じて起きる正当防衛であり、「不正」ではない²¹。物語の語り手も、「旅行や知識や関心により、トー

マス・ブッデンブロークはその周囲で商人としての偏見にとられることの最も少ない人間であった」(397)と述べて、トーマスが公平に人や物事を判断することを認めている。トーマスは「不正」を為さない「正義」の人である。

4. 「共苦」：人間愛の徳

「正義」は消極的な徳であるが、「人間愛」の徳であるアガペーは他者の苦の緩和のために行う積極的な徳であり、この徳もトーマスに見出せる。

親戚の三姉妹は、父親のゴットホルトが勘当されて商会の後継者になれず、貧しい暮らしに甘んじているせいか、トーマスの母や妹のトーニとその娘、そして貧しい親戚の娘でブッデンブローク家に身を寄せているクロティルデにまで、会えば必ず皮肉や嫌味をいう。それでもトーマスは三姉妹に、「君たちの気持ちはよくわかる、気の毒だと思うよ……」(301)という思い遣りのある態度で接するので、三姉妹もトーマスには嫌味をいわず、「少し毒のある敬意」(301)を示すのである。またトーマスは、一緒に育ったクロティルデに、資産のない上流階級の娘が入る養老院に入れるよう手配する。トーマスは、三姉妹の辛さやクロティルデの老後の不安に「共苦」して、彼女たちの苦悩を緩和するよう行為しているものであり、これらはトーマスに具わる「人間愛」の徳の顕れといえる。

トーマスの「人間愛」は息子や妻にも発揮される。息子との関係は、トーマスの期待が強すぎてうまくいかない。しかし第10部第5章で妻と少尉の音楽の楽しみに嫉妬する心を抑えきれず、ふとハノーに、「少尉はもう2時間もママのところにいるんだよ……」(716)と漏らす。するとハノーは、「金茶色の目を見開き、今まで一度もなかったくらいに、大きく、澄んだ、愛情のこもった目を父親の顔に向けた」(716)。

ハノーがどれくらい理解していたか、わからない。しかしただ一つ確かだったのは、ふたりが目を見交わしていたこの瞬間、よそよそしさと

冷たさ、強制と誤解はふたりの間からすべて解消してしまい、トーマス・ブッデンブロークは、[…]、恐れや悩みが問題になる場合、いつでも息子の信頼と献身を期待できるということ、このことをふたりは共に感じたのであった。(716)

トーマスとハノーは言葉なしに見つめ合い、互いに相手の苦悩を直観して「共苦」し合う。そしてトーマスは、商人になれない息子のために、遺言状に商会の解散を記し、息子は父が弁護士と遺言状を書いているときに、誰も邪魔しないように部屋の前で見張る。これらの行為は、いつでも相手を助ける意思があることを示して相手の苦悩を緩和する行為であり、父と息子の「人間愛」の徳の顕れといえる。

また、妻のゲルダは頭痛や不快感で朝起きるのが遅いために、トーマスは結婚後もひとりで朝食を摂るのだが(vgl. 334)、ゲルダを非難することはない。トーニの再婚相手ベルマネーダーを招いて一家で遠出する際も、ゲルダは自分が「落ち着いた毎日の暮らしに向いた人間で、刺激や気晴らしに向いていない」(377)といい、参加を渋るが、トーマスに説得されて参加することになる。そのときトーマスはゲルダに、「本当に有り難く思うよ」(378)と、言葉で感謝の気持ちを表して、ゲルダの苦痛を緩和する。語り手も「そういう問題では基本的にトーマスの同意が得られることを確信していなかったならば、ゲルダはトーマスと結婚していなかっただろう」(377)と述べる。ゲルダはトーマスが自分の性質を理解する人間であると感じて結婚したというのである。

さらに妻と少尉の音楽の楽しみが醜聞になってトーマスを苦しめるときも、夫婦の関係は損なわれていない。トーマスは、自分たち夫婦の関係は「理解と思いやりと沈黙を基盤にしている」(713)と考えている。つまりハノーとの場合と同様に、言葉を交わさなくとも理解し合える関係というのである。このような夫婦の関係は、一般の夫婦の関係と大きく異なるので、世間の人々には理解できず、人々はふたりのことを結婚当初から18年

後に至るまで噂し続ける。ふたりは恋愛結婚のはずだが、普通の恋愛結婚には見えないというのである。

むしろ最初からふたりの間に認められたのは礼儀正しさ以外の何ものでもなかった。夫婦の間では全く珍しい、几帳面で敬意に満ちた礼儀正しさであったが、これは不可解なことに、内面的な距離やよそよそしさから生じたものではなく、非常に独特な形で暗黙のうちに深く相互に親しみ、知り合い、絶えず互いに気を配り、寛容であることから生じた態度であるようにみえた。(708f.)

ゲルダは芸術家的性格で、嫁いできた街の人々や自分が属する貴族的市民階級の人々に親しまない。初めて客を招いた午餐会のあとも、ゲルダは、「今の私の頭は死んだみたい」(335)という。ペルマネーダーを迎えての遠出を嫌がるのも、市民的な楽しみに興味がなく、賑いや喧騒を好まないからである。ゲルダは市民的性質を持たないのである。

夫のトーマスは、商人になるために習得的に市民的实际的性格を身に付けるが、商人の利益獲得競争に伴う非倫理性に憤りを感じるように、トーマスの叡知的性格は詩人のような内省的芸術家的性格で、ゲルダと同様に非市民的である。それゆえゲルダが市民たちとの交際で苦痛を感じていることを容易に直観して「共苦」する。そしてゲルダが朝食を共にしなくとも不満を言わず、家を新築する際にはゲルダが音楽を楽しめる部屋を作る。初めての午餐会の後や、ペルマネーダーとの遠出に参加する際に、言葉で感謝の気持ちを表す。トーマスはこれらの行為によってゲルダの苦痛を緩和しているのである。

ショーペンハウアーは愛には「エロス」(利己的な愛)と「アガペー」(「共苦」の愛)があるといい²²、後者の「共苦」の愛に最高の道徳的価値を置いている。トーマスはゲルダの芸術家的性質を愛して求婚し、仕事のない夜はゲルダのヴァイオリン演奏を聴いたり、ゲルダと一緒に読書するなどして、社主と市参事会員の仕事での疲労や苦

悩を緩和している。トーマスはゲルダを必要としているのであるから、ゲルダへの愛は利己的な愛、エロスである。しかしまたトーマスは、非市民的性質ゆえに生じるゲルダの苦痛に「共苦」して、言葉や行為でゲルダの苦痛を緩和しているので、その場合のトーマスの妻への愛は、「共苦」の愛、アガペーである。ショーペンハウアーはエロスとアガペーの愛の「二つの混合はよくあること」²³と認めていることから、トーマスもエロスとアガペーの双方を具えているといつてよいだろう。以上のことから世間の人々が感じるトーマスとゲルダの礼儀正しい関係は、トーマスの側から考察するとトーマスの「共苦」から生ずる「人間愛」、アガペーゆえに生まれていると解釈することができよう。

おわりに

トーマス・マンが「業績の倫理家」、「現代の英雄」と名づけたトーマス・ブッデンブロークの倫理性は、ショーペンハウアーの倫理思想と性格論を基にするならば、習得的性格である市民階級の倫理性と、叡知的性格である詩人のような内省的で芸術家的な性格による「共苦」の倫理性である。前者の倫理性は個体を維持するためのものであり、エゴイズムが基礎にあるが、後者の倫理性はエゴイズムの放棄によって生ずる。トーマスの成功と苦悩は、このような根本的対立を抱えたふたつの性格によって生じていると考えることができよう。

* Thomas Mann: *Buddenbrooks. Verfall einer Familie*. In: *Große kommentierte Frankfurter Ausgabe. Werke - Briefe - Tagebücher*. Bd. 1. 1. Hg. u. textkritisch durchgesehen v. Eckhard Heftrich; unter Mitarbeit von Stephan Stachorski und Herbert Lehnert. Frankfurt a. M., 2002. *Die Buddenbrooks* は本全集の GKFA 14. 1, 128 と略記。なお本稿では、『ブッデンブローク家の人々』からの引用は文中の括弧内に前掲書のページ数のみを記す。

【注】

- 1 GKFA I. 1, S. 159.
- 2 Arthur Schopenhauer: *Parerga und Paralipomena* II. In: Arthur Schopenhauer: *Zürcher Ausgabe Werke in zehn Bänden*. Bd. IX. Zürich (Diogenes) 1977, (= Schopenhauer) S. 350.
- 3 Vgl. Hans Wysling: *Buddenbrooks*. In: *Thomas Mann Studien*. 13. Thomas Sprecher, Cornelia Bernini (Hg.), München (Franke), 1996 (=Wysling 1996), S. 370; Vgl. GKFA I.2, S. 59. トーマス・マンがニーチェの『道徳の系譜』を最初に読んだ時期は明確になっていない。しかしヴィスリングだけでなく、GKFA 全集の注釈も、フリーデマン氏の溺死はニーチェの『道徳の系譜』の最後にある言葉「何も欲しないというよりもむしろ無を欲す」の翻案であるとしており、マンの『道徳の系譜』初読を、『ブッデンブローク家の人々』執筆前としている。
- 4 トーマス・マンが初めてショーペンハウアーの著書を読んだ年代は明らかではない。Vgl. Katrin Max: *Philosophie*. In: *Buddenbrooks Handbuch*. Nicole Mattern / Stefan Neuhaus (Hg.) Stuttgart (J.B. Metzler) 2018, S. 191. マックスは 1899 年としている。Børge Kristiansen: *Philosophie*. In: *Thomas Mann Handbuch*. Helmut Koopmann (Hg.) Stuttgart (Alfred Kröner) 2001, S. 276. クリステンセンは 1895/96 年としている。Werner Fritzen: *Zaubertrank der Metaphysik: quellenkritische Überlegungen im Umkreis der Schopenhauer-Rezeption Thomas Manns*. Frankfurt a. M. (Lang) 1980, S. 38. フリツェンは以下のようにマンの記述を 6 カ所から引用して、確定できないという。①20 歳の時、②20 歳、③23 か 24 歳、④24 歳、⑤(1915 年の) 16 年前、⑥20 代初め。
- 5 Vgl. Matthias Köbler: *Empirische und metaphysische Mitleidsethik bei Schopenhauer*. In: *Schopenhauer-Jahrbuch*. Würzburg (Königshausen & Neumann) 2020, S. 219. コスラーは、ショーペンハウアーが道徳 Moral と倫理 Ethik を明確に区別しないで用いていると記している。
- 6 Schopenhauer II, S. 415.
- 7 Ebd., S. 441.
- 8 太田匡洋「ショーペンハウアーにおける共苦と想像力」、『倫理学研究』48 号(関西倫理学会編) 2018 年、90-100 頁。
- 9 Schopenhauer VI, S. 252f.
- 10 Ebd. II, S. 417.
- 11 Ebd..
- 12 Vgl. Ebd. II. S. 466.
- 13 伊藤貴雄「共苦における意志と表象」、『ショーペンハウアー研究』第 5 号(日本ショーペンハウアー協会編) 2000 年、30 頁。
- 14 Hermann Kurzke: *Thomas Mann Epoche-Werke-Wirkung*. München (Beck) 1985, S. 45.
- 15 Ebd., S. 76.
- 16 Vgl. Hans Wißkirchen: „Er wird wachsen mit der Zeit...“ Zur Aktualität des *Buddenbrooks-Romans*. In: *Thomas Mann Jahrbuch*. 21. Frankfurt a. M. (V. Klostermann) 2008, S. 107. ヴィスキルヒェンも、『ブッデンブローク家の人々』の市民性を、生活様式や知的な外見によって貴族の称号がないことを補っているとして、18 世紀の貴族的な性質があることを指摘している。
- 17 Helmut Koopmann: *Thoms Manns Bürgerlichkeit*. In: *Thomas Mann 1875-1975. Vorträge in München Zürich-Lübeck*. Frankfurt a. M. (Fischer) 1977, S. 39-60. 『ブッデンブローク家の人々』における市民性はトーマス・マン自身のものもあり、マンは『ファウストゥス博士』に至るまで市民性について考察しているという。
- 18 参照：別府陽子「トーマス・ブッデンブロークの『ショーペンハウアー体験』—『悲劇の誕生』を中心とする『三連星』の受容」、『文芸学研究』第 21 号(文芸学研究会) 2018 年、23-45 頁。
- 19 Schopenhauer II, S. 441
- 20 Ebd..
- 21 Ebd. II, S. 422-424.
- 22 Ebd. II, S. 466.
- 23 Ebd..